

質的研究評価基準への展望

— 「Sage 質的研究キット」と APA における議論を手がかりに —

企画・話題提供・司会	能智 正博	(東京大学大学院教育学研究科)
企画・話題提供・司会	鈴木 聡志	(東京農業大学教職・学術情報課程)
企画・話題提供	大橋 靖史	(淑徳大学総合福祉学部)
話題提供	柴山 真琴	(大妻女子大学家政学部)
指定討論	上淵 寿	(早稲田大学教育・総合科学学術院)
指定討論	永田 素彦	(京都大学大学院人間・環境学研究科)

企画趣旨

質的研究の広がりとともに、質や評価基準に関する議論も持続的に行なわれてきた。例えば 2016 年から日本でも質的研究の教科書シリーズ、「Sage 質的研究キット」(新曜社、全 8 巻)が翻訳・出版され始めたが、本シリーズには研究の質を問う Flick の巻が含まれているほか、それぞれの巻においても様々なかたちで評価に関わる問題が論じられている。一方 APA (アメリカ心理学会) では 2014 年から専門学術誌 *Qualitative Psychology* が刊行され、それに呼応して論文の評価基準への関心も高まっているようであり、*American Psychologist* 誌に評価基準を発表する方向で準備が整いつつある。一方、評価には質的研究に共通の部分があれば、同時に、方法論により異なる部分もある。指標を作成すること自体の問題もしばしば指摘される。本シンポでは、「キット」の訳者の何人かが、おのおの得意とする方法論と「キット」の記述を参考に、APA の論文評価基準に関する議論を紹介する。その上で、『質的心理学研究』における論文査読の実際にも照らしながら、質的研究論文の評価のあり方について議論する。

発表内容

研究デザインの視点から (鈴木聡志) : U. Flick 著『質的研究のデザイン』における質的研究の質の問題を紹介し、これと比較することで APA 基準を検討する。彼は質的研究の質の問題について 1 章を使い、研究の計画、実行、報告の 3 つのステップに分けて説明している。その内容を概説すると、計画の段階では、研究課題やリサーチ・クエスチョンや住民についての既存の知識を考慮して特定の手法やデザインを決定すること (適用) と、特定の手法やデザインが研究課題とフィールドに合っているかを何度もチェックすること (適切性) と、多様性に関わっていることが質を向上させる。実行の段階では、厳密性と創造性、一貫性と柔軟性、基準と方略の緊張の中でフィールドと向き合うことで質が発展する。報告の段階では、透明性、フィールドからのフィードバック、結果を届ける読者のためにどのように書くか、が重要である。彼の議論では質的研究のデザインを通じた質の向上に関心があり、明確な基準のようなものは示されていない。彼は、読者にはアカデミックな読者と実践的な状況にいる読者がいて、それぞれに向けて書く際書き方のスタイルが異なることを指摘し、前者に向けた論文やレポートには何らかの基準が必要だが、読者が後者の場合はより簡略で柔軟な書き方が望ましいとしている。APA 基準は前者向けの論

文の書き方を論じているが、後者向けのレポートの基準も必要かもしれない。

ナラティブ研究の視点から（能智正博）：S. Kvale 著の『質的研究のための「インター・ビュー」』と比較しつつ APA での議論を紹介する。本書において研究の質は、インタビュー自体の質、文字起こしの質も含めた多層的なものと考えられており、研究論文の質はそれらいくつかの面が統合された結果である。インタビュー研究は、職人が自分の作りたいもののイメージを念頭になるべくよい素材を調達し、その素材を生かしながらイメージを調整し、工芸品（craft）を完成させていく過程に類比される。より具体的には、たとえばテキストに照らして問いを明確化・精緻化していくこと、研究過程全般を通して多様な面から確認を重ねること、自分の理論的立ち位置を明確化してそれに即した見方や方法を工夫することなどが含まれる。これらは必ずしもすべてが、伝統的な研究論文の評価基準とは重ならず、ナラティブ研究の射程の広がりもそこに反映しているだろう。今回の発表ではそうした広がり、APA の基準に関する議論においてどういうふうにかかされているかという点を含めて考察していきたい。

ディスコースの心理学の立場から（大橋靖史）：T. Rapley 著『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』を参照しながら、APA 基準を読んでみたい。会話分析やディスコース分析では、リサーチ・クエスチョンを立て、それに基づき分析材料を収集し、データを書き起こす、あるいは、アーカイブを作成するプロセスを経ていく。こうしたプロセスがこの種の質的研究においては中核的な作業となる。プロトコルやアーカイブを作成していく中でどれだけテキストを読み込めるかが、研究の質を決定することになる。コード化を含め、元のデータに何度も立ち戻りつつ、次第に分析を深めていくことが大切になる。そして、そうした深化のプロセスを経たうえで、これまでの研究や多様なケースとの比較検討を通じ、分析の妥当性について検討し、論文を作成することになる。この点において、会話やディスコースの分析のアプローチは基本的には、他の質的研究アプローチと共通するものと言えよう。今回の発表では、会話やディスコースの具体的な分析を踏まえ、APA の基準に関する議論をどのように捉えればよいか、また、今後それらをどのように生かしていけばよいかについて検討してみたい。

エスノグラフィー研究の視点から（柴山真琴）：本発表では、M. Angrosino 著『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』を拠り所にして、APA の論文評価指標に関する議論を検討する。同書では、エスノグラフィーを「観察、インタビュー、文書分析を主要な技法とする多角的なデータ収集法」として捉え、特に観察をエスノグラフィーの中核的な技法として位置づける。その上で、複数の章にまたがる形で「研究の全過程で妥当性を絶えずチェックすること」の必要性を強調する。具体的には、(1)観察段階：「トライアングレーション」により複合的なデータを収集すること、(2)記録段階：組織化されたフィールドノートをつけること、(3)分析段階：「記述的分析」と「理論的分析」を行い、「イーミック」と「エティック」の視点の間を往復すること、(4)執筆段階：迫真性のある首尾一貫したナラティブとして表現すること、が妥当性の担保に寄与すると指摘する。さらに「厳密に書くこと」と「豊かに書くこと」の間で生じる問題にも言及する。当日の発表では、エスノグラフィー研究に要請されるこれらの諸点が APA の議論にどのように盛り込まれているのか、両者間に見られる記述の濃淡の違いに着目しながら、比較検討する予定である。